

自分を知ろうチェックリストの因子構造

---構造方程式モデル分析を用いた震度の異なる2集団の同時比較---

山田 富美雄

豊本 満喜子

狩野 裕

(大阪府立看護大学看護学部) (大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科)

阪神・淡路大震災の折りに、子どもの震災ストレス反応を数量的に把握する目的で開発した「自分を知ろうチェックリスト」は、23個のイラストからなるストレス反応尺度で、不安、うつ、混乱という3つのストレス反応と、愛他性の4得点が算出できる。本検査は、震災2ヶ月後、半年後、1年後の3度にわたって震度7の西宮市内の児童と、震度5の大阪府H市内の児童を対象に実施し、震災ストレスのケアを目的とした健康教育に供したことはすでに報告している¹⁾。

本報告では、自分を知ろうチェックリストの因子構造を、こうして得られた2つの集団を比較することによって検討を加えることを目的とする。

方法

対象 自分を知ろうチェックリストを実施した児童のうち、分析対象としたのは震災2ヶ月後、半年後、1年後の3度とも受検した震災時小学校1~5年生ならびに中学校1~2年生児童で、震度7の集団では943名、震度4の集団は902名にのぼった。

分析 震災2ヶ月後の資料について2集団別に積率相関行列を求め、最尤法、プロマックス回転を用いて探索的因子分析を行い、不安、うつ、混乱の3因子モデルとした検証的因子分析を集団別実施した。さら

に検証的因子分析を2集団同時に行い、想定される3因子と各項目との関係をパス図を描いて検討した。

結果と考察

探索的因子分析の結果、項目によっては複数の因子と関係するものがいくつかみつき、また集団間で関係の異なるものもみつかった。

個別に実施した検証的因子分析の結果、震度7と震度4で採用したモデルは一致しなかった。これら2集団間の因子構造上の違いを検討するために、2集団間に共通のモデルを想定し、2集団ごとに適合度を検証してパス図を描いたのが図1・2である。図からわかるように、不安、うつ、混乱の3因子間の関係は極めて酷似しているものの、各因子を構成する項目の組み合わせが大きく異なるものもわずかながらみうけられる。

以上の結果は、自分を知ろうチェックリストの簡易尺度化が妥当なものであったことを改めて証明するものと理解できよう。

文献

¹⁾服部祥子・山田富美雄 阪神・淡路大震災と子どもの心身、名古屋大学出版会、1999

(やまだ・ふみお、とよもと・まきこ、かの・ゆたか)

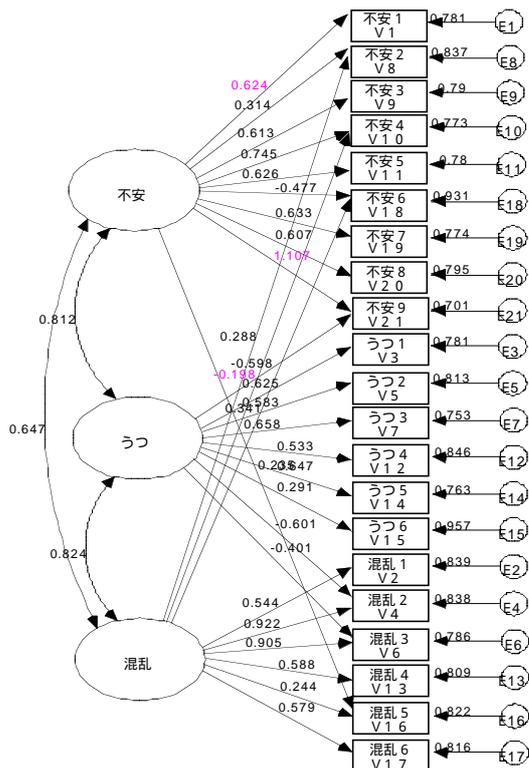


図1 震度4グループの因子構造最終モデル

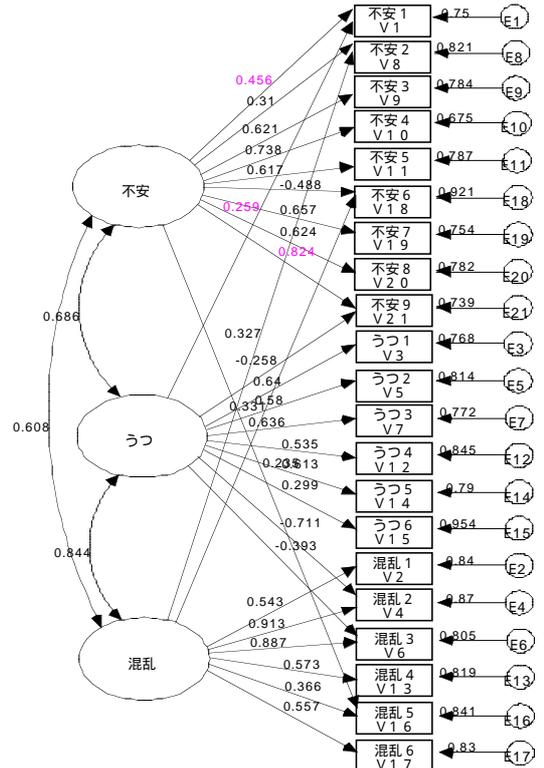


図2 震度7グループの因子構造最終モデル